



# 古道が紡ぐ物語



## 齋王群行の道（都祁山之道）

さいおう  
齋王とは、伊勢神宮に奉仕するため天皇が遣わした皇女あるいは女王で、齋宮（三重県明和町）に暮らし伊勢神宮に関する祭祀を行った。実在が確認できる最初の齋王は、天武天皇が壬申の乱の勝利を天照大神に感謝するため、天武二年（674年）に伊勢に遣わした「大来皇女」である。大勢の従者を従えた行列は「群行」といわれ、数百人規模の華麗なものともなった。都が飛鳥にあった時代には、桜井から宇陀を越える「伊勢街道」が使われたと考えられるが、平城遷都後は、大和高原を越えて「都祁」を通る伊勢への最短ルート「都祁山之道」が開かれ、都祁には天皇の行幸や齋王の群行の際に宿所とする「堀越頓宮」（奈良市都祁友田町）が築かれた。

### 都祁山之道の開削

奈良盆地の北部を東西に通る古代の官道「北の横大路（業平道）」は、「和邇下神社」（天理市櫛本町）の参道のあたりで、平城京から南に通じる上街道（上ツ道）と交わり終点となる。

ここから大和高原の山々に向けて「都祁山之道」が始まる。「続日本紀」には、平城遷都を行った元明天皇の霊亀元年（715年）6月に「大倭の国の都祁山之道を開く」と記される。

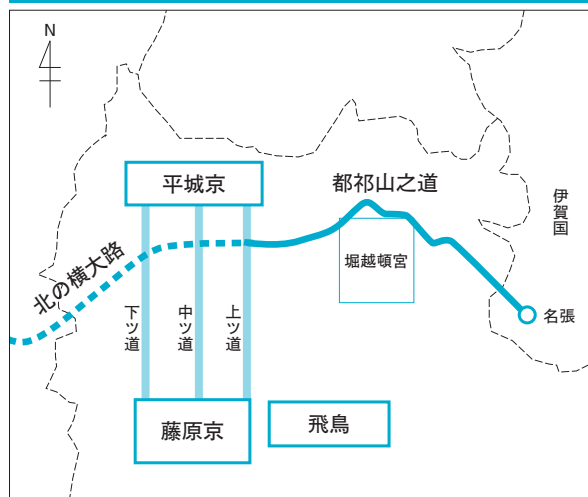
藤原京から平城京へ都が遷り、伊勢方面や東国へ初瀬を迂回するのは不便でもあり、新たな近道が開削されたが、都祁は縄文時代からすでに人々が住む開けた土地であった。

「ツゲ」の地は、日本書紀では「鬪鷄」、古事記では「都祁」と記され、平安期以降は現在の「都介」も使われるようになった。大和高原のほぼ中央に位置する東西約18km、南北約25kmの盆地で、鬪鷄国造、あるいは都祁直が支配する小国家ともいべきものが形成されていた。

5世紀後半にこの地の支配者が葬られたとみられる「三陵墓東古墳」は全長110m、後円部直径45mの前方後円墳で、隣接する円墳の「三陵墓西古墳」も直径40mの規模と、古くからかなりの経済力を有し繁栄していたことがうかがえる。

また、海拔400m内外の冷涼な高地であることから、日本書紀では仁徳天皇の時代、夏に氷を献上したとされる。後の長屋王木簡にも記されてお

### 古代主要道路と都祁山之道略図



和邇下神社参道と国道169号線



三陵墓東古墳から西古墳と都介野を望む

り、冬の氷を保存する氷室が存在したのは明らかで、允恭天皇期（5世紀）創祀とされる「氷室神社」（天理市福住町）は水の神を祀る神社である。

そのように、大和国中との往来も活発で、いくつかの道があったと思われることから、都祁山之道が和邇下神社の参道から始まった後、福住、都祁とたどることはわかっても、そこに至る経路には諸説あり、天理のすこし北の虚空蔵（奈良市）からのルートなどがあるが、古代の道はできるだけ直線的に造られたことから、その南の、今の名阪国道を縫うように進む、岩屋（天理市）を通るルートが有力のようである。

### 伊勢神宮と齋王

都祁山之道は、齋王が往還する「齋宮登大道」としても今に伝わる。齋王が天照大神を祀る伊勢神宮に奉祀した齋宮制度が確立するのは、「扶桑略記」によると天武天皇の時代である。

しかし、伝説の時代まで遡ると、「日本書紀」では、第10代崇神天皇の代まで皇居の中に天照大神を祀ってきたが、天皇はそれを畏れ多いこととして、天照大神を豊鍬入姫命に託し、大和の笠縫邑に祀った時を齋王の始まりとしている。

次の垂仁天皇の時には天照大神の祭祀は倭姫命に受け継がれ、伊賀、近江、美濃、尾張を巡った後に伊勢に鎮座地を見つけたとする元伊勢伝承が有名であるが、実体はよくわかっていない。

そして、天武天皇14年（685年）には、伊勢神宮の式年遷宮の制も制定されるなど、この時代に天照大神を祀る様々な制度が確立され、齋宮制度も、武士が台頭し天皇の権力が衰える鎌倉時代まで67人の齋王が遣わされた。

齋王は、卜定で選ばれた未婚の皇女あるいは女王で、1年の禊の後に伊勢に赴く。多くは5歳から15歳の少女であり別れの哀しみもあった。

齋王の住む齋宮は、伊勢神宮から10kmあまりの多紀郡明和町にあったとされ、1年のうち3回、神嘗祭など主要な行事に神宮に奉仕したという。

### 都祁の頓宮と齋宮登大道

都が飛鳥、藤原京にあった時代には、齋王の往還は初瀬から宇陀を通ったが、平城遷都後はやや遠回りとなるため都祁山乃道が使われた。



都祁水分神社（上）と「聖武天皇堀越頓宮之跡」碑（右）



また、平安時代になると、平安京から、近江の勢多・甲賀・垂水、そして伊勢の鈴鹿・一志の五カ所の頓宮（仮の宮）で宿泊を重ね伊勢に赴いた。

ただ、つつがなく任期を全うした齋王は、また同じ道で帰京したが、天皇崩御や近親者の喪などの凶事で任を解かれる場合には、大和を通る別の帰還の道を取り、一志から川口、伊賀の阿保、大和の都介、山城の相楽を経て、木津川から船で下り、難波津で禊ぎを行った後に京に入った。

この理由は、旧都平城京への畏敬で、より格式を保って帰京することが望まれたとされる。

また、都祁の地は、奈良時代に聖武天皇が東国行幸に出立した際の「堀越頓宮」の伝承地である。現在の「都祁水分神社」の境内には「聖武天皇堀越頓宮之跡」の石碑が建ち、また、齋王が宿る「都介頓宮」の跡でもあるとされる。

その先、都祁山之道は小倉から宇陀市の上笠間、深野を経て名張市安倍田に至る。この道から北の山々は、古くは東大寺の建築用材を切り出した地である。また、「お水取り」の松明も多くは滝で名高い赤目から運ばれるが、かつてはその運搬道でもあり、齋宮登大道と重なる要路であった。

伊勢北街道（青越之道）である国道163号線の「坂ノ下」の交差点には、地藏とともに、「東大寺松明調達の道」の道標が建つ。（山城 満）